

三月の空の下

小川未明

青空文庫

花の咲く前には、とかく、寒かつたり、暖かかつたりして天候の定まらぬものです。その日も暮れ方まで穏やかだつたのが夜に入ると、急に風が出はじめました。ちょうど、悪寒に襲われた患者のように、常磐木は、その黒い姿を暗の中で、しきりに身震いしていました。

A院長は、居間で、これから一杯やろうと思つていたのです。そこへはばかるような小さい跫音がして、取り次ぎの女中兼看護婦が入つてきて、

「患者がみえましたが。」と、告げました。

「だれだ？ 初診のものか。」と、院長は、目を光らしました。

「はい、はじめての方で、よほどお悪いようなのでございます。」

まだ年の若い彼女は、こんなものを院長に取り次いだのは悪いとは思つたけれど、それよりも、目にうつる哀れな男の姿のほうが、いつそう強く心を動かしたのです。けれど、院長は容易に座を立ち上がろうとしなかつた。

「そんなに悪いのに、ここへやつてきたのか。」

「はい。」

院長は、きたときいては、捨ててもおけなかつたのでした。どんな身分の患者であつて、またどこが悪いのか、それを知りたいという職業意識も起つて、「いま、ゆくから。」と、静かに、答えて、苦い顔つきをしながら、居間を出ました。控え室をのぞくと、乞食かと思われたようなよぼよぼの老人が、ふろしき包みをわきに置いてうずくまつていました。

院長は、その老人と、取り次いだ看護婦とを鋭く一瞥してからいかにも、こんなものを……ばかなやつだといわぬばかりに、

「みてもらいたいといふのは、この方かね。」と、ききました。

「さよう、わたくしでござります。遠いところ、やつと歩いてまいりました。」と、老人はとぎれとぎれに答えました。

「遠いところ？　なんで、もつと近所の医者にかからなかつたんだね。」

「だめです、いいお医者さんがないません。」と、老人は頭を左右に揺すりました。

（そうだろうとも、だれが、こんなものを見てやるものだ。このばかな女でもなければ、ひとめみづかえ、一目見て追い帰すにちがいない。いつたい、医者というものをなんと心得ているのだろう。）

「おじいさん、せつかくだが、私は、これから急病人の迎えを受けているので、出でかけなければならないのだ。だからすぐみてあげることができない。どうか、よそへいつてもらいたい。」

院長は、そばに、まごまごしている、看護婦のかお顔をにらんで、奥へさつさとはいってしました。

「じゃ、どうしてみてもみてくださらんのか。」と、老人は、つぶやきました。
 「お気の毒ですけれど、先生はたいへんお忙しいので、みられんとおっしゃいますから、よそのお医者さまへいつてくださいまし。」と、看護婦は、そういいました。

「ははあ、よそのものはみても、私をばみられないとおっしゃるのだな。どうせ、この老人はくたばるのだからいいけれど、そうした道理というものはないはずじゃ。もう私は歩けないが、どこか近所に、お医者さまはありますかい。」と、老人は、やつと小さな荷物をせおつてから、ききました。

「じき、すこしゆくとにぎやかな町になります。そこには、幾軒もお医者さまがあります。」

少女は、暗い外の方を指して、町へ出る方向をおじいさんに教えました。ところ

どころに点いている街燈の光が見えるだけで、あとは風の音が聞こえるばかりでした。ちょうど、その時分、B医師は、暗い路を考えながら下を向いて歩いてきました。彼は、いま往診した、哀れな子供のことについて、さまざまのことを思つていたのです。

その家は貧しくて、かぜから肺炎を併発したのに手当ても十分することができなかつた。小さな火鉢にわずかばかりの炭をたいたのでは、湯気を立てることすら不十分で、もとより室を暖めるだけの力はなかつた。しかし、炭をたくさん買うだけの資力のないものはどうしたらいいか、それよりしかたはないのだ。近くに、宏荘な住宅はそびえている。それらの内部には、独立した子供部屋があり、またどの室にも暖房装置は行き届いているであろう。そこに生まれ育つた子供と、あの貧しい家に病んでねている子供とどこに、かわいらしい子供と、ということに変わりがあるうか。しかし、その境遇はこうも異なつていて、わたしは、あの哀れな子供を助けなければならぬ。

B医師は、夕方、自分を呼びにきた、子供の母親の、おどおどした目つきと、心配いそうな青ざめた顔とを思いあわせたのです。

「あんなになるまで、医者にかけないという法はないのだが、もう手後であるかもしない。」

悲壮な気持ちで、門を入ろうとするときも、内部からがやがや人声がきこえました。ひとあしまえ

B 医師は、すぐに老人に注射を打ちました。

「気がついた。おじいさん泣かんでいい。ここは医者の家だから、安心するがいい。」
と、顔をつけるようにして、B医師は、燈火の消えかかるとするような老人をなぐさ

「あんたは、お医者さまか。」と、老人は、かすかに目を開いてB医師を見て、たずねました。

「そうです、だから、安心なさるがいい。」と、答えてB医師は、自ら老人を抱えて、診察室のベッドの上に横たえて、やわらかなふとんをかけてやりました。

「先生、この人は、助かりましょうか。」と、老人をつれてきた近所の人たちが、さきました。

「わかりません。なにしろ極度に疲れていますから。私は、できるだけの手当てあをいたしましたが……。」と、B医師は答こたえました。

その夜、
老人は、
最後にしんせつな介抱を受けながら死んでゆきました。そこしづば
よろうじんは、さいごにしんせつなかいほうを受けながら死んでゆきました。

かり前まえ、かたわらにあつたちい小さな荷物にもつを指しながら、訴うつたえるように、うなずいて見せたのでした。

夜明け方よあがたになつて、ついに雨あめとなつたのであります。B医師は、老人ろうじんが身から離はなさなかつた荷物にものを開けてみました。紙箱かみばこの中には、すでに芽めを出だしかけた、いくつかのすいせんの球きゅう根こんがはいつていました。また、古びた貯金帳ちょきんちょうといつしょに、なにか書いたものがほかから出てきました。それを見ると、

「私は、親おやもなければ、兄きょうだい弟ひとだいもない一人ひとりぼつちで暮くろらしてきました。私の一生いっしょは、けつして楽らくなものではなかつた。人のやさしみというものをしみじみと味わわなかつた私は、せめて死の際しきわだけなりと、医者いしゃにかかつてしんせつにしてもらいたいと思おもつて、苦くるしい中から、これだけの貯金ちよきんをしたのである。どこで私は死ぬかしれないが、おそらく、しんせつな医者いしゃを探さがして、その人の手にかかつて死にたいと思おもつてている。この金かねで死後の始末まつまつをしてもらい、残りは、どうか自分と同じことごとくような、不幸な孤独ひとりな人のために費つかつてもらいたい。」

こういうようなことが書いてありました。終生しゆううせいで独身どくしんで過すぎした、B医師はバラツク式しきであつたが、有志ゆうしの助じょりょく力りきによつて、慈善病院じぜんびょういんを建てたのは、それから以後いご

ことであります。もちろん、老人の志も無とならなかつたばかりか、B医師は、老人の好きだつたらしいすいせんを病院の庭に植えたのでありました。

しかし、A病院は、いまも繁栄しているけれど、慈善病院は、B医師の死後、これを継ぐ人がなかつたために滅びてしましました。その建物も、いつしか取り払われて、跡は空き地となつてしまつたけれど、毎年三月になると、すいせんの根だけは残つていて、青空の下に、黄色い炎の燃えるような花を開きました。そして、この人の心臓に染まるような花の香氣は、またなんともいえぬ悲しみを含んでいるのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「民政」

1934（昭和9）年3月

※表題は底本では、「三一月『かつ』の空『ふく』の下『した』」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

三月の空の下

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>